

大使コラム（2013年2月）

今年も一ヶ月が過ぎ、2月となりました。先月は、年明けには晴天の日が見られたリスボンでも、その後、晴天と雨天が同じ日に何度も入れ替わる不安定な気候が続きました。雨を伴う強風で、木々が倒れた日があったのは、天候の悪いこの季節でも珍しいことだそうです。アーモンドの花の開花前線が南のアルガルベ地方から徐々に北上し、既にリスボン近郊でも桜に似たこの花を見かけるようになりました。しかし、当地に本格的な春が訪れるまで、まだ不安定な気候が続くことでしょう。

大統領は今年も元旦に国民向けの年頭演説を行いました。演説の大半は経済・財政問題に割かれ、特に若者の失業率の増加に強い憂慮を示すとともに、財政再建プログラムの実施は重要であるが、成長政策とのバランスも必要なことを強調していました。実際、本年から来年にかけてのGDP成長率や失業率の予想値は、政府やトロイカの見通しでも厳しいものとなっています。ただし、今後も輸出の好調が見込まれ、また先日、5年物の国債の発行で予想以上の応札があり、発行額を予定より増やし、利率も5%を切ることができるなど、国際金融市場への復帰に向けた好ましい第一歩を記すことができました。

また大統領は、1月から実施の本年度予算のうち、公務員、年金受給者および退職者の休暇手当の停止や年金への追加的連帯税に憲法違反の疑いがあるとして、憲法裁判所に審査請求したことも明らかにしました。当国の予算は法律の形式をとっていますが、大統領が違憲の疑いを持ちながらこれを認可したのは、予算執行の混乱を避けるためとはいえ、いささか奇妙にも感じられました。判決は春にも出される見込みですが、昨年のように違憲判決が出れば予算の変更が必要になり、政治的影響も懸念されます。

他方、大統領が演説で指摘したように、この国の経済危機が深刻な政治危機に発展しないのは、当国の国民性に加え、ほとんどの政党が「財政支援プログラム」を支持しているからです。社会党の前政権が国際的な支援を要請し、社会民主党の現政権がその方針を継承したという経緯は、この国が現在の苦境を乗り越える上で大きな力となっています。与党より高い世論の支持のある社会党が、解散総選挙への政局を求めているように見えるのも、この経緯があるからでしょう。国家の危機を乗り越える際には、政治の安定が何よりも重要ですが、大統領はこの意味で、この国の賢明さを指摘したかったのかもしれない。

大統領は年頭の演説のほか、当国駐在の外交団との新年祝賀会でも挨拶を行

いました。ここでは、外交面の今年の課題に触れ、特に経済面で欧州域外の国との関係強化を訴えました。日本との関係でも、ポルトガルと日本との出会いから470周年に当たる本年を、両国間の交流拡大の契機にしたいと述べたのは印象的でした。

先月は、アルジェリアでテロリストによる天然ガス・プラントの襲撃事件があり、多くの日本人も犠牲となる理不尽な事件がありました。事件については、当国政府もテロを非難する声明を出しています。ちなみに、ポルトガルは天然ガスの約3割をアルジェリアに依存し、パイプラインで輸入しています。またインフラ整備などでポルトガル企業の進出も比較的多く、700名近くの在留者がいるそうです。歴史的に海外移民が多いポルトガルですが、経済不況の中で最近もまた海外で働く人が増加しています。

アラブ諸国との関係を見ると、北アフリカとは長い交流の歴史がありますが、近年は湾岸諸国との関係も顕著になっています。ポルトガルの外務大臣が昨年末に湾岸諸国を歴訪し、またここ2年あまりの間に、UAE、クエート、オマーンがリスボンに大使館を相次いで開設したのも注目されるところです。

先日、当国の中部にあるコインブラ市を訪問しました。リスボンやポルトの都市圏に次ぐコインブラ都市圏の中心都市であるこの町は、最初のポルトガル王国の首都となったところです(1139年)。また、欧州でも古い歴史を誇るコインブラ大学でも知られています(1290年創立)。旧市街を歩くと、この古い歴史や学園都市の落ち着いた雰囲気を感じます。

日本との関係では、大学の日本語講座や、日本の研究者や留学生が多いことでも縁のあるところですが、16世紀に遡る関係についてはあまり知られていないようです。1580年代にリスボンを経てバチカンを訪ねた「天正少年使節団」は有名ですが、彼らはバチカンからリスボンに戻った後、コインブラを訪ねています。

また、それ以前の1550年代に、フランシスコ・ザビエルから鹿児島で洗礼を受けた日本人(洗礼名ベルナルド)がポルトガルまで旅をし、コインブラのイエズス会修道院で修行し、ここで逝去したことが、同会の記録に残っています。イエズス会の初代総長であったイグナチオ・デ・ロヨラからバチカンに招かれ、教皇にも拝謁しています。

このベルナルドの墓が市内の「新カテドラル(セ・ノヴァ)」にあるというので訪ねてみました。教会の方の案内では、教会内の左側の側廊にあるロヨラの像の前の床下にあるお墓に眠っているとのことでした。この教会は後の建築で、ベルナルドの遺骸はイエズス会の墓から後でここに移されたとのことでした。

が、墓に墓碑はなく、また事情を知っていると紹介された元大学教授の話でも、ここにベルナルドが埋葬されている確証は得られませんでした。ただ、イエズス会の記録から、彼の欧州での存在は確かだとすれば、欧州を訪ねた最初の日本人ということになるのかもしれませんが。

コインブラでは市長にお会いし、日本との関係強化について意見交換しました。また大学では副学長が学内を案内して下さり、18世紀に建てられた「ジョアニア図書館」では織田信長の頃に日本を訪ねて「日本史」を残したルイス・フロイスの「日本通信」やメンデス・ピントの初期の版本、また当時の日本地図など、貴重な文献を見せていただきました。

当大使館では、日本と縁のあるコインブラとの交流促進に、これからも努めていきたいと考えています。

皆様には時節柄、ご自愛のほどをお祈り申し上げます。